学院史編纂室共同研究報告

二〇二〇年度の共同研究のテーマは次のとおりである。

研究テーマ	研究員
宣教師研究	○舟木　譲（院長・経済学部） 池田　裕子（学院史編纂室） 神田　健次（顧問・名誉教授） D・H・デルミン（高等部） 村瀬　義史（総合政策学部）
関西学院の戦前・戦中・戦後	○井上　琢智（元経済学部） 岩野　祐介（神学部） 辻　学（広島大学大学院） 橋本　祐樹（神学部） 本郷　亮（経済学部） 古川　彰（元社会学部）

（○印・主任研究員）

「宣教師研究」

本共同研究は二〇一六年度よりW・R・ランバス、J・C・C・ニュートン、C・J・L・ベーツ各宣教師（院長）に関する研究を中心として、継続的に実施されている。二〇二〇年度は新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大によって多くの制限が加わる中であったが、各研究員によって、以下の研究並びに活動が実施された。

舟木主任研究員は、二〇二〇年がカナダ・メソヂスト教会の本学への経営参画一一〇年、C・J・L・ベーツ宣教師院長就任一〇〇年、そして、現在の世界の状況と酷似する不安が世界を覆った太平洋戦争開戦前年、ベーツ宣教師が院長・学長を辞任し帰国され八〇年ということを意識した授業とメッセージを下記のように行った。

1. 経営戦略研究科「企業倫理」講義「関西学院とキリスト教―関西学院の草創期と日本―」（二〇二〇年六月二〇日、一二月六日）
2. 経営戦略研究科「会計倫理」講義「関西学院とキリスト教―関西学院の草創期と日本―」（二〇二〇年七月一六日、二〇二一年一月一六日）
3. 共通教育科目「『関学』学2」講義「訓令十二号から

カナダ・メソヂスト教会の参画へ」（二〇二〇年一〇月一二日）

4. 共通教育科目『関学』学2」講義「高等教育機関への歩み」（二〇二〇年一〇月一九日）

5. 関西学院クリスマス礼拝メッセージ（二〇二〇年一二月一五日）

6. 中学部ＰＴＡクリスマス礼拝メッセージ「Holy fire and holy Christmas」（二〇二〇年一二月一九日）

7. 高等部クリスマス礼拝メッセージ「『今』はどんな時なのか」（二〇二〇年一二月一四日、一五日）

池田裕子研究員は、本誌に「W・R・ランバスが日本から送った最初の報告書―『南メソヂスト監督教会伝道局第四一回年次報告』とピンソン著『ランバス伝』―」を執筆した。

また、例年通り、広報誌『KG TODAY』に次の四本を日本語と英語で寄稿した。広報誌は今年度末で終刊となるため、二〇〇九年四月から一二年続いたこの連載も終了する。

1. 「マッケンジーとガントレット」、“D. R. McKenzie and His Friend, Edward Gauntlett”

2. 「二人のニュートン」、“Two Newtons for Twinned Departments”

3. 「ジョンズ・ホプキンス大学のゼミ仲間」、“Four Eminent Alumni of Johns Hopkins University”

4. 「一〇〇年の矛盾―ランバスの葬送」、“A Paradox over the Century”

同窓会発行の『母校通信』には、「関西学院スピリットの生き証人～原田の森の学生会～」と「関西学院スピリットの生き証人～“Mastery for Service”の日本語訳とベーツ院長の故郷」を寄稿した。

このほか、『学院史編纂室便り』に「スラッシャー先生の想い出～初めて褒めてくださった先生～」を執筆した。

昨年度に引き続き、「カナダ研究入門Ａ」と「カナダ研究入門Ｂ」（いずれも代表：水戸考道法学部教授）の初回の授業（関西学院とカナダ）を担当したが、コロナの感染防止のため、春学期は資料等の公開、秋学期はZoomを使ったオンラインで行った。

依頼に応えた講演等は次の二件であった。

1. 講演「アーカイブズから時空を超えて」、七月二八日、啓明学院（理事、教職員対象）。

2. メッセージ「世界の心をもったランバス」、九月二六日、

中学部創立記念礼拝。

神田健次研究員は、本誌において論文「フィランデル・スミス・メソヂスト一致神学校から関西学院神学部へ―最初期の神学部編入学生と新入学生解明の試論―」を執筆した。その論文は、東京のフィランデル・スミス・メソヂスト一致神学校への南メソヂスト監督教会の参与と学院創立に伴う神学部への教員と学生の移籍をめぐり、宣教師のランバス、ニュートン、モズレーなどの動向と関連付けながら考察した。とりわけ最初期の神学部の編入学生と新入学生について、また学院最初の卒業生ともなった田中義弘、中山栄之助、鵜崎庚午郎について、これまで余り明らかではなかった側面について解明を試みた。

また新潟県の農民運動の父と呼ばれた井伊誠一の東京帝大時代と神戸時代の若き日に焦点を当て、論文「大正デモクラシイと井伊誠一―東京と神戸時代を中心に―」を『新発田郷土誌』（二〇二一年三月発行）に執筆した。特に井伊誠一の神戸時代において、原田の森の関西学院の近辺に住んでいたことから、当時宣教師ベーツが大学昇格を視野に入れ学問的な充実を目指すため東京帝大より招聘した小山東助、河上丈太郎、新明正道、松沢兼人などと井伊との影響関係を考察した。

さらに昨年の一一月九日には、神戸栄光教会で開催された近畿宗教連盟総会に招かれ、「ミナト神戸の宗教とコミュニティー」と題して記念講演を行い、関西学院や神戸栄光教会の歴史との関連で創立者ランバス宣教師の働きについても言及した。

宣教師の子孫との交流に関しては、三月二四日から二七日まで、アリシア・アンダーウッドさん（J・C・C・ニュートンご来孫）が交換留学で愛知淑徳大学に向かう前に関西学院に立ち寄られ、院長や神学部長を表敬訪問される予定と前紀要に記載したが、新型コロナウイルス感染症の影響で交換留学が中止となったため実現に至っていない。またカナダ研究客員教授として来学予定であったポール・ウィリアムズさん（D・R・マッケンジーご曾孫、トロント大学名誉教授）も同様に来学が延期となった。

さらにジム・サーロー宣教師（一九五三年～五五年、関西学院中学部英語教員、一九五七年～六二年、宣教師として現在のオハラ・ホールに住まわれ、活動）のお連れ合いとして一九五七年～六二年に関西学院に居住（現・オハラ・ホール）され、関西学院関係者らと深い交流のあったサー

ロー・節子氏が、二〇一七年にノーベル平和賞を受賞した特定非営利活動法人アイキャン（ICAN）の創設時よりの主力メンバーで、受賞記念講演も行われたことを受けて、関西学院賞ならびに名誉学位記の授与が二〇一九年度に決定していた。二〇二〇年五月一三日に西宮上ケ原キャンパス中央講堂で授与式ならびに記念シンポジウムを開催予定で、ご子息のアンドリュー・サーロー氏と共に来日予定であった。しかし、こちらも前記のお二人と同様の理由で延期を余儀なくされ、現時点では、二〇二一年一〇月七日から一六日に同窓会が準備されている「ベーツ院長の足跡を辿る旅」の中で授与式を実施する方向で準備が進められている。

（舟木　譲）

「関西学院の戦前・戦中・戦後」

井上琢智主任研究員は、神崎驥一第五代院長の伝記執筆のための基礎資料公表の一環として遺族より寄贈された神崎驥一筆の「日記」（全容は、本誌二三三～二五八頁参照のこと）のうち、一九一六年および一九年を同窓である倉橋桃代さんのご協力を得て翻刻し、登場人物を中心に多くの注を付して、本誌に公表した。これによってデジタル版『渋沢栄一伝記資料』を用いて本『紀要』前号ですでに公表した「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について―神崎驥一、乾精末と国際連盟協会、排日移民法、太平洋問題調査研究会、軍事教練―」（下）で明らかにできた神崎驥一による戦間期の日本における平和運動への貢献を明らかにしたが、今回の「日記」翻刻公開によって、その裏付けを行うと同時に、『渋沢栄一伝記資料』では記されていない事実を明らかにできた。

また、二〇一九年一二月一四日、ＮＰＯ法人向日庵の公開研究会で報告した「〔研究ノート〕関西学院〔高等学部文科〕の英語教育・研究―寿岳文章をめぐる人びと―」の前提となる「関西学院における英語教育の開始―『英語の関学』の源流を探る―」を『向日庵』（ＮＰＯ法人向日庵機関誌）第四号（二〇二一年三月刊行予定）に投稿した。なお、同誌は国立国会図書館の発行するISSN 2435-9505を取得し、ＮＰＯ法人向日庵のWebにて第一号から公開されている。さらに上記「研究ノート」を基礎に「関西学院〔高等学部文科英文学科・文学部英文学科〕の英語教育と研究―竹友藻風、志賀勝、曽根保、岩橋武夫、寿岳文章を中心に―」（仮題）として原稿化に努めている。本『紀要』

に投稿予定である。

また、寿岳文章研究に関しては『母校通信』（一四五号、二〇二〇年三月六五頁）に「向日庵と寿岳文章・しづ夫妻」を投稿、掲載された。さらに、二〇二〇年六月以降本格化した「向日庵」に保存されている「向日庵資料」の整理に、ＮＰＯ法人向日庵会員として参加しているが、その整理状況を「向日庵だより」（二〇二〇年初秋号二頁）に「壽岳文章展に向けた向日庵所蔵資料の資料調査報告（1）」を投稿し、掲載された。この調査を通じて、寿岳文章関連の新史・資料（寿岳文章の詳細な日記、寿岳文章宛のベーツ、ノーマンなどの関西学院関係者からの書簡、校歌〝A Song for Kwansei〟の作詞者ブランデンから退職直前の神崎驥一院長への献辞など）が発見されており、これら新史・資料調査研究を通じて、関西学院における寿岳文章の活動内容が明らかになることが期待される。これら新史・資料の紹介・公開展示を本学で開催する必要があるであろう。これらの新史・資料を使った中島俊郎甲南大学名誉教授による学院史研究会での講演予定が、コロナ渦のために延期となっている。

向日市と同市から業務委託を受けたＮＰＯ法人向日庵とが共同して延期、開催された「寿岳文章　人と仕事」展および「生誕一二〇年　寿岳しづ」展（二〇二一年一月二三日～三月二一日、向日市文化資料館）に寿岳文章および岩橋武夫の卒業論文が学院史編纂室から貸し出され、開催期間中の一部日程で展示され、多くの関心を引いた。

岩野祐介研究員は、担当する神学部科目である「日本キリスト教史Ｂ」において、明治期～戦後までのキリスト教主義大学について扱う回において、文部省訓令十二号に対するミッション・スクールの対応、関西学院の対応を教えている。また、神学部科目「メソジストの伝統と神学部」では、今年度オンライン授業の形式ではあったが、一九六八～一九七〇年頃の学園闘争期における関西学院、特に神学部の動向について、かなり詳しく年表や復刻資料などを用いながら講義を行っている。

（井上琢智）